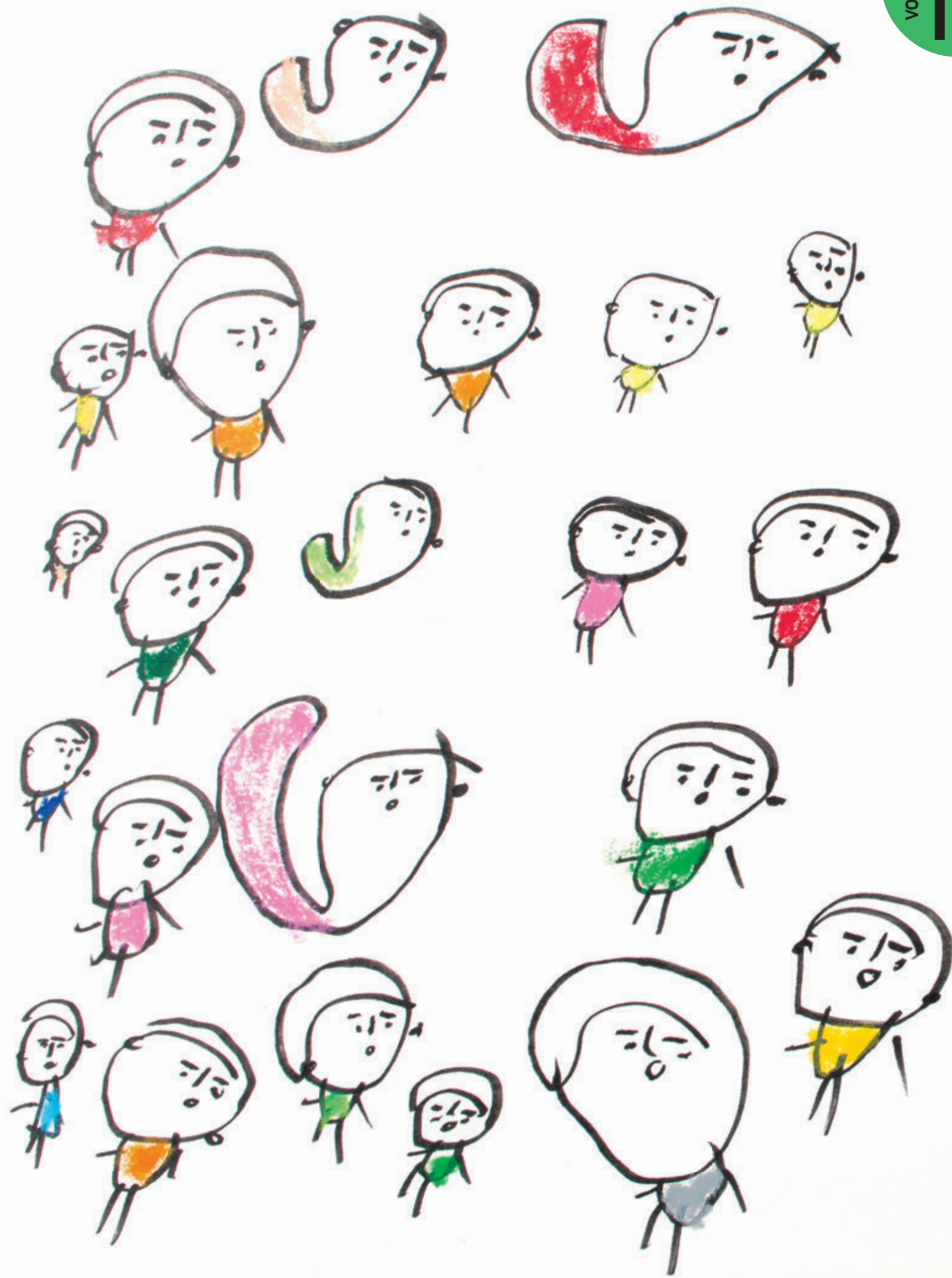


いわきから「ごちゃまぜ」 あらゆる障がいのない社会へ

GOCHAMAZE
times2018
AUTUMN
vol. 10

企画を通じて「ちがう世界」を伝える

インタビュー「ごちゃまぜな人」第10回

松田 崇弥さん

「ちがう世界から、ちがう世界を描き出す」をテーマに、知的障害のある人と社会の橋渡しをする。そんなテーマを掲げたプロダクトブランド「MUKU PROJECT」。「ブランドとして障害者の存在をいかに伝えていくのか」を伺いました。ジレンマの狭間に、障害をいかに伝え、いかに受け止めるのかのヒントが見えてきました。



ブランドを立ち上げたのは、知的障害のある人たちの魅力や可能性を社会に広げたいと思っていました。もともと双子の兄に自閉症があり、いつか知的障害のある人と関わる仕事がしたいと思っていました。そんな時、障害のある方の描く作品を扱う美術館でアート作品に触れて、すごくいいなと思って。それを、上質なプロダクトとして世の中に出すことはできないかなと考えたんです。

ただ、作品を安い値段で販売してしまうのは、すごくいやだな。値段は高くてもいいから、最高品質のメーカーと組んで、いいものをつくらうと考えていました。価値を下げず、より上質な商品を届けている会社と組むべきだと思っていました。そうやって MUKU のコンセプトができていきました。

プロダクトを世に出すというとき、そこに「障害」という言葉を出すか出さないか、とても悩みました。最初は障害という言葉を出さず、純粋にカッコ良いものを出そうと思っていました。でも、徐々に勉強していくうち、描かれているアート作品って知的障害を持っている人だからこそ描けるものなんだと思うようになったんです。

というのも、知的障害のある人の描く絵は、繰り返しの表現方法がとても多いんです。猫をひたすら描き続けるとか、花を描き続けるとか。規則正しいルーティンで生活するので、そのルーティンや規則性がアートにも現れているんです。兄もそうでした。でも、そ

れは苦しくてそうなっているのではなく、むしろそれが気持ちいいから繰り返してやっているんだろうなと思って。それで、「知的障害のある人たちがやっているアートです」とハッキリ言ったほうがいいのかと思うようになりました。ポジティブに伝えたいなと。

障害福祉に関わっていると、社会課題と向き合っているようなイメージを持たれがちですが、実際には「社会を良くしたい」とか考えているわけではなく、感覚としては、部屋が汚いから片付けるみたいな感覚に近いかもしれません。でも、他人の部屋まで片付けようとは考えてない。結果として社会にまで飛び火していったらいいな、と僕は思っています。

兄に障害があるので、子どもの頃は母親と「障害を考えるシンポジウム」とかに行くような、ある種、障害福祉のサブレッドみたいな人間でした。でも、東北芸術工科大学で、小山薫堂さんのもとで企画を学んで、すっかり考え方が変わりました。今やっていることも社会変革ではなく、ひとつの企画として考えています。社会を変えるのではなく、企画によって生まれたものが受け入れられることで、結果的に障害者の存在や、アート作品の意味が社会に伝わっていくというような感じ。

実は、来年から再来年かに「就労継続支援B型」をやりたいなと思っています。ソーシャルホテルみたいな宿泊事業をやりたいなと思っていてるんですよ。ホテルって繰り返しのルーティンワーク

松田 崇弥 まつだ・たかや

1991年5月8日生まれ。岩手県出身。双子の弟。東北芸術工科大学 企画構想学科卒。小山薫堂率いる企画会社、オレンジ・アンド・パートナーズのプランナーを経て独立。ボーダーのカノウセイを追求する企画・編集チーム、株式会社ヘラルボニー、代表取締役社長。福祉施設に所属するアーティストの作品をプロダクト化するプロジェクト、MUKUの代表を務める。

が多くて、10時にチェックアウトです。布団をたたみ、皿洗いはこの時間ですと、時間が区切られたのがやりやすいなど。

認知症の高齢者がスタッフを務める「注文をまちがえる料理店」というのがありましたが、よくも、挨拶ができないホテلمانとか、皿を落としてしまう皿洗いや、彼ら自体もコンテンツ化しながら、間違っってしまう、うまくできないっていうことを面白がって寛容に受け止められるような宿泊施設に挑戦したいなと思っています。

ネガティブなのが、なぜかポジティブでユーモラスなものとして感じられてしまう。そういう価値の転換というか、そのくらい振り切れたことをしてみたいんです。よく自身、福祉のプロじゃないんで、現場を知ったら課題に直面するとは思いますが、まじめさが求められるような分野だからこそ面白い仕組みにしたい。それってチャレンジだと思し、やっけて面白く思える企画をこれからも作っていければと思います。



シンポジウム「REBIRTH PROJECT」shibuya dancing mix | t-shirts

家族、友人、会社や地域、さまざまな考えの違いや価値観・・・。社会とは常に「自分とは違う人」だらけです。そんなごちゃまぜの世界では、コミュニケーションにまつわるトラブルが付きもの。そこで今回の特集では、日常に潜むトラブルの原因を紐解き、コミュニケーションを仕事にする人たちからアドバイスを伺いながら、ごちゃまぜのコミュニケーションを考えます。

あるよね、こんなコミュニケーションの悩み

話しかけてみたいのにきっかけが作れなかったり、話したことがズレて伝わってしまったり、あさつてのほうからトラブルに巻き込まれてしまったり。特別な環境ではない日常的な局面でも、コミュニケーションにまつわる悩みは多いもの。あなたにもありますよね？ こんな悩み。

#ご近所さん

お隣さんで飼っているワンちゃん。とても可愛らしく、私達夫婦もその姿を見るたびに癒やされているのは事実です。しかし、お外で飼っているせいもあってか、いつもそのワンちゃんの鳴き声が響いています。お家に入るとか、なんとかして欲しいとは思いつつも、**揉めごとに発展してしまいう**で、言えずにいます。(ツイッター調べ)

#発達

発達障害のある娘が、「パパ、今日ね保育園でプールに入ったんだ～」と一言。それに「うっそ～」と短く、驚きを含めたりアクションを娘に返したつもりでした。しかし、この「うっそ～」の表現を、娘は『嘘つき呼ばわり』されたと**違う意味で捉えてしま**い、娘を怒らせてしまいました。(Y・Kさん)

#初対面

初めての相手と話すときに、**話題の探し方**や話して良いこと・悪いことがわからない。相手がわかる話題を自分が持っているかどうかわからないのでなかなか話しかけられない。話しかけられたとしても盛り上がるかどうか不安・・・(M・Sさん)

#接客

感情的に怒っているお客様のお話を聞く時にとっても緊張します。**余計に怒らせてしまうかも**しれないという不安がありますし、大きな声で長時間お話を聞いていると表情も強張り動揺してしまいます。(受付嬢)

#おじいちゃん

一緒に住むおじいちゃんにイライラ！**同じことを何度も聞かれると**、答えるときにイライラしてしまいます。忘れちゃったり聞こえなかったりするんですけど、急いでいたり疲れていたりするとついついキツイ口調になってしまいます。(Y・Sさん)

#職場

職場で社員旅行があって、自分の上司と同じ部屋になってしまった！**世代と立場が違う相手**なので、何を話していいか困った。(K・Yさん)

#嫁・姑

子どものしつけについてモヤモヤすることが多い！お姑さんは会社で言う所の上司にあたる存在なので、意に反することをされてもNOと言うのが難しいです。(私ビビりなので)ヤクルトに使うストローの色が気に入らなくてダダこねる娘に対し、論じている最中に別なストロー渡しちゃうとか、まだ1歳なのにコーラ飲ませちゃうとか(笑) **思っていることを本音で言い合えない**のが辛いです。(K・Nさん)

#地雷

触れられて嫌なことに触れてしまうのではないかと境界線がわからない。**どこまでが聞いていい話題か**、プライベートなことは聞いていいのか、連絡先の教えどころなど、わからないことがたくさん！(R・Yさん)

#夫の悩み

一緒に生活していくうえで、**直してほしいことの伝え方**が難しい・・・喧嘩になっても嫌だし、タイミングが悪いと大炎上しそう・・・でも伝えないと自分がモヤモヤしてしまう。うまく伝える方法はないかなあ・・・(夫)

#妻の悩み

結構大事な話をしている時に、相槌や返事など、**相手の反応がまったくない**のが気になる！まず聞いているのか聞いてないのか、それとも内容について考えてるのか、フリーズしてるのか、彼の現在の脳内ステータスがまったくわからない!!おでこに「読み込み中」とか「演算中」とか、プログレッシブを出しといてほしいぐらい。(妻)

互いの違いを知ろうとすること

私たちが抱える悩みごと。その多くが「コミュニケーション」に関するものかもしれません。なぜなら、人はひとりでは生きられない社会的な存在であり、常に他者や社会との関わりの中で生きていかねばならないから。家族や友人、ご近所や学校、職場など、考えの異なる他者との暮らしには、いつもトラブルが付きものです。

本来、人の価値観や考えは「ごちゃまぜ」です。しかし日本では、障害の有無ひとつとっても、障害のある側が社会に合わせることを余儀なくされ、属しているコミュニティから外れないよう自分を抑えたり、足並みを揃えた「同じ」が求められてきました。ごちゃまぜであるべき存在は、「同じ」を求められるため、個性や自分らしさを犠牲にしてきたようにも思います。

しかし昨今、ダイバーシティへの理解が進み、さまざまな価値観や考えの違いを尊重することが求められるようになってきています。それにもない、障害の有無や性的指向などの違いを個性と捉え、取って隠さずに「表明」しあいながら生きようという人も増えてきました。ありのままの姿を認め、自分らしく生きていい。それが社会のメッセージになりつつあります。

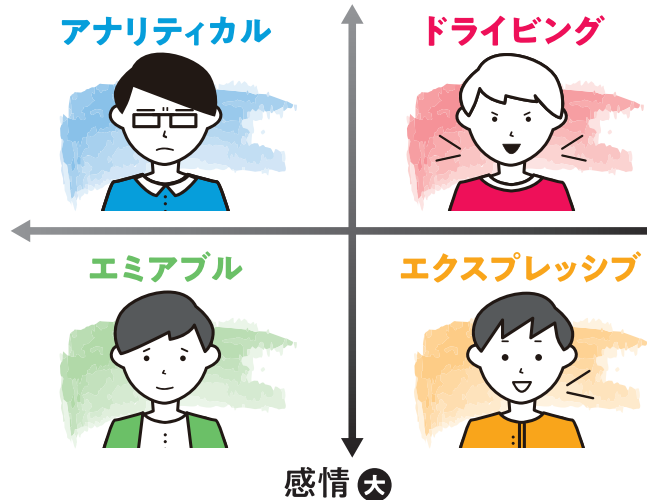
そのような「ごちゃまぜ」の社会では相互理解が欠かせません。自分を理解して欲しいのと同じように、他者への理解も必要です。コミュニケーションのトラブルの原因は、自分にも、相手にもあるかもしれない。ならば「己を知り、相手を知る。そして、相手をすることでコミュニケーションが変わる。その相互理解を受け入れる『姿勢』こそ、ごちゃまぜな社会に必要なものかもしれません。

あなたのソーシャルスタイルを4つに分析

STEP1

ソーシャルスタイル理論では、人の基本的なコミュニケーションのスタイルを、ドライビング、エクスプレッシブ、アナリティカル、エミアブルの4つに分類します。自己診断で構いません。まずは自分はいかがでしょうか、というスタイルを見つけてください。

自己表現



STEP2

自分のタイプを自己分析したら傾向を分析しよう
自分のスタイルを選んだら、さらに自分の「傾向」をチェックしてみよう。時間がある人は他のスタイルのチェックもしてみよう。点数がもっとも多くなったスタイルが、あなたの本当のスタイルかも。

ドライビング

- ☐ 行動力はある、いつでもエネルギッシュ!
 - ☐ 向上心・決断力がある
 - ☐ 人間関係よりも仕事が大事でしょ
 - ☐ 何事もベースが速いと言われる
 - ☐ 保身的な態度は嫌い
 - ☐ リーダーシップを発揮するのが好き
 - ☐ 人から「性格キツイ」と言われたことがある
 - ☐ 人をなかなか信用できない
 - ☐ 優しい感情を表すことが苦手
 - ☐ 褒められると「裏があるかも?」と思ってしまう
- このタイプは自分が会話の主導権を握り、他の人から指図を受けるのが大嫌い。基本的に早口で断定的に話す傾向があるため、相手によっては上から目線、怖そうと感じさせてしまう場面も。時には相手の視点に立ち、物腰を柔らかく接してみよう。

エクスプレッシブ

- ☐ エネルギッシュなことをやるのが好き
 - ☐ 細かいことはあまり気にしない
 - ☐ 計画を立てたり、計画通りに動くのは苦手
 - ☐ 飽きっぽい
 - ☐ 新しい仕事を始めるのは得意
 - ☐ 事務処理などルーティンワークは苦手
 - ☐ 場を仕切るのは任せて!
 - ☐ 調子がいいやつだと言われる
 - ☐ なにか話題を提供することが得意
 - ☐ 過去の規則や慣習に囚われるのはおかし
- このタイプは元気がよく、快活なムードメーカーです。場を盛り上げることが得意でアイデアや想いを話すことが苦になりません。ただ他の人の話を聞くのが苦手な傾向があるので、「○○さんはどう思いますか?」など他の人にも話を振り、聞く姿勢を持つことが大切です。

アナリティカル

- ☐ データや資料を集め、分析するのは苦じゃない
 - ☐ 計画通りに実行するのが好き
 - ☐ 失敗や間違いはできるだけたくない
 - ☐ ルーティンワークはむしろ好き
 - ☐ 人から頑固とか真面目と言われる
 - ☐ 孤立してもあまり苦じゃない
 - ☐ いつも話が長くなってしまう
 - ☐ 急に意見を求められても困ってしまう
 - ☐ 継続は力なり。何事もとことんやりたい
 - ☐ 感情を出すのはあまり得意じゃない
- このタイプは、物事を熟考してから話したいタイプ。そのため「何を考えているのかわからない」と誤解されがち。ベースが合わず発言の機会を逃してしまつた時には、後日でも意見をまとめて伝えてみて。会議などの場合には事前に議題を確認すればスムーズに話すことができます。

エミアブル

- ☐ 人をサポートする仕事が好き
 - ☐ 人の心や空気を読むのが得意
 - ☐ 困ってる人や悩んでる人から相談される
 - ☐ リスクを冒すのは苦手
 - ☐ 話しやすい人だねと言われる
 - ☐ 相手の反応が気になっちゃう
 - ☐ 気配りは上手なほうだと思う
 - ☐ できるだけ人とは対立したくない
 - ☐ 感謝や労いの言葉をかけられるとやる気が出る
 - ☐ 単独よりチームでの仕事が好き
- このタイプは優しい雰囲気を持った人で、聞き役に回ることが多いタイプ。頼まれてしまうと断り切れず、貧乏くじを引いてしまうことも。自分の意見がないのではなく、強く主張していない場面が多々あるため、強き主張相手に意見を伝えてみてはいかがでしょうか。

コミュニケーションの プロに聞いてみた！

みなさんが様々な場面で頭を悩ませているコミュニケーション。ここでは実際にコミュニケーションを生業にする人たち、IIプロフェッショナルが、どういったことを心掛けて日々コミュニケーションをしているのか、インタビューしてみました。プロの視点やコツを知ること、毎日のコミュニケーションのヒントが見えてきます。

発達のプロ



吉田有里さん
(臨床発達心理士)

お子さんと接するとき、心にかけていることは、そのお子さんの好きなもの、興味のあるものに一回乗っかってみることです。お子さんがこの人はこの遊びが好きかな？と試しに教えてくれる時があります。そんな時に、良い悪いではなくて、あなたのその視点面白いじゃん！その見方もありだね！面白いね！という感想を伝えるようにしています。

これは発達がない小さいお子さんでも高校生でも同じことが言えます。例えば、ずっと電車の音を聞いている高校生に「何を聞いているの？」と聞くと、「〇〇線の発着音を聞いている」と教えてくれたんです。私は、路線の違いで発着音が違うことを気にしたことがないので、素直に「すごいね、そんなところ気付くんだね」と感想を伝えま



私は子どもが主役になれるコミュニケーションを意識しています。命令や禁止を促すような言葉や「何作ってるの？」という無意識に答えを求めてしまう会話は避けます。まずは子どもの言葉や行動をよく見守り、オウム返しでその言葉をそのまま受け入れ理解を示します。この積み重ねが信頼関係の構築に繋がります。

子どももプロ

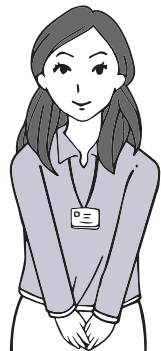
子どもが主役になれる コミュニケーション



伊藤仁美さん
(保育士)

接客のプロ

接客はチーム戦



石原奈々さん
(販売接客業)

店頭ではお客様の要望やご質問に適切に答えられるようにイエスカノーで答えられるクローズドクエスションと、どんなことに困っているか自由に答えられるオープンクエスションを使い分けています。お客様に気持ちよく帰っていただくためにも自分ひとりで対応しようとせず、一緒に働くスタッフとアイコンタクトやインカムでコミュニケーションをとって対応するようにしています。



対話を行う時に意識していることは、出てきた言葉をすぐに評価せず、「あなたはそう考えるのですか」とか、メッセージで「私はこう感じました」と伝えながら対話を続けること。弁護士という立場上、話してもらいやすさよりもとあるのかもしれないですが、人は嘘をつくもの

対話のプロ

キーワードは 相手の「恐れ」を取り除く



菅波香織さん
(弁護士／未来会議事務局長)

だということも頭に入れながら、嘘をついてしまう前提となる「恐れ」をできるだけ取り除き、相手の話に耳を傾けるようにしています。

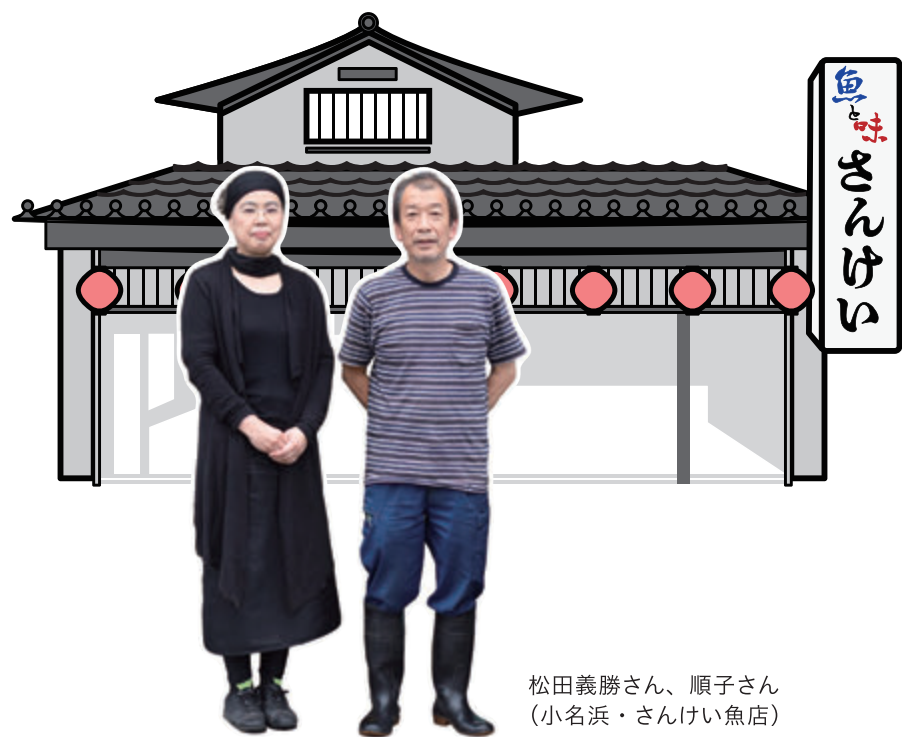
まずは、相手のベースに合わせ、話したいことから話してもらいます。ある程度の信頼関係や安心感が育まれないと、こちらの聞きたいことを聞いてくれないと思います。前提として考えておきたいのは、仮に罪を犯した人も、意見の異なる人も、対話の相手こそ、その状況を誰よりも知っている専門家なのだという。相手がいざばんそのことをよく知っている。だからこそ尊重し、話を聞き、一緒に答えを見つけていくというアプローチを心がけています。

夫婦協業のプロ

ずっと一緒に いるからこそその距離感

義勝さん もう結婚して38年になるけど、実は中学校の同級生なんだよ。だから知り合っただけはもうかなりの年数。仕事も家でも休日もずっと一緒だからね、お互いやっぱり仲良くするように心がけているよ。ピリピリしてても直前で抑える。そうしないと仕事にも響いちゃうから。怒鳴ったり「でてけ」なんてことは言ったことないなあ。ストレスを溜めないようにカラオケに行ったりね、息抜きは大事だよ。

順子さん 基本的にはずっと一緒にいるので、そんなベタベタするわけじゃないけど、やっぱり仲良くしようとするのは大事。それに、主人がお店の稼ぎ頭だし、できるだけ長く頑張ってもらわなくちゃいけないから、お店ではできるだけ主人が働きやすいように私はフォローに回るようにしています。ずっと一緒にいるからこそ、お互いに適度な距離感を保ちながら仲良く、それが長く続いた秘訣かもしれないですね。



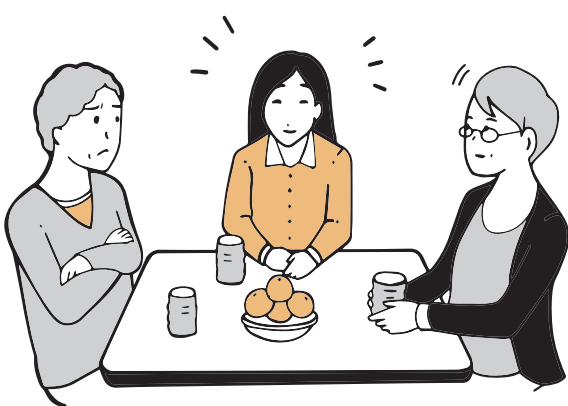
松田義勝さん、順子さん
(小名浜・さんけい魚店)

地域コミュニティのプロ

急がない じっくり待つこと

伝統芸能に限らず様々な担い手が不足している地域では、ひとりが担う役割が多く、新たな企画を進める際に負担が生まれてしまうことが多々あります。実際に、私が活動を始めた時には、「せっかく中止になったお祭を復活させて、また負担を増やすのか」と言われたことも。しかし、じっくり話をしてみると、こういった方こそ伝統芸能を地域に残したいと強く思っていることがわかりました。

地域の方とのコミュニケーションで気を付けていることは、「急がない」、「話をよく聞き、信頼関係を作る」、そして「外の知見を活かすチャンスを持ち続けること」。



小宅優美さん
(田人町 黒田の念仏踊りプロジェクトメンバー)

「ということ。信頼関係を築こうとするほど地域の論理に自分も染まってしまいうなりなりですが、以前と同じ形では、結局また開催が止まってしまうはず。持続可能なお祭へと形を変えていくためには、歴史に敬意を持ちながらも、外の知見を反映させるチャンスを見逃さない気持ちを持ち、じっくりと待つこと。それが大切だと思っています。」

認知症ケアのプロ

記憶が残らなくても 感情が残る

認知症の人は、記憶が残らなくても感情が残る。うまく言葉が話せなくても、気持ちは伝わる。思いやる言動が、よい影響をもたらすと考えています。特に、うまく言葉で伝えることができない方とコミュニケーションを取る際「何を伝えようしているか」を理解するため、



芳賀 諭さん
(認知症介護指導者)

思いを想像しながら、聴くことで、相手の真意を知ることができる」ともあります。こちらの接し方で、何らかの反応を示してくれます。うまく話せなくても、身振り手振りで合図してくれる人もいます。こちらが、途中であきらめてしまつては、よいコミュニケーションはとれません。「分かってもらえた」という安心感を得ていただけるよう、心掛けています。

まとめ

自分を受け止めて
欲しいけれど
まずは相手を受け止める



プロに共通していたのは、「あなたはこう考えているんだね」「あなたには世界がそう見えているんだね」という、賛成でも反対でもない受け止め。何らかの評価を下すのでも、自分の意見を出すのでもない。しかし相手の話を受け止めるという態度でした。コミュニケーションという「自分から話す」ことを意識してしまいがちですが、プロに共通するのは「相手の言葉を受け止める」ところからスタートするところ。「聞く」ことが、コミュニケーションの本質なのだと気付かれます。

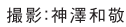
もうひとつ。プロたちは、コミュニケーションを感情の応酬のなかで行っているのではなく、ひとつの「型」を通じて行っていることがわかります。人間というのはそもそも感情的な生き物。本能的な領域を「型」によってコントロールしようというわけです。「そう思うようにする」「そう考えることにする」。プロに共通するのは、自分へ言い聞かせることで型を持つという、いわば「セルフコントロール」でした。

さてここからは、もう少しだけ実践者の声を聞いていきます。コミュニケーションについて二人の方にお話を伺いました。一人は、ソーシャルデザインワークスの東京支部があるシェアオフィス「RYOAN PARK 大塚」を運営する竹沢徳剛さん。もう一人が、いわき市にある菩提寺の僧侶、霜村真康さん。どのようなコミュニケーションを実践しているのか。二人の言葉から、ごちゃまぜ的コミュニケーションを考えていきます。(次のページへ)

RYOZANMARKというシェアオフィスとシェアハウスを運営する竹沢さん。様々な人たちが集まる場を運営するうえで心がけていることを聞くと、「意識しているのはひとりの同じ人間として接するということ。外国人だから、障害者だからというのではなく、お客様扱いせずインボルブする。同じ目線に立つことが大事だと思うんです」と語ってくれました。

ただ、大事なものはそれだけではない。いちばん身近なところにいる他者。すなわち**家族との向き合い方が、日**

まうと竹沢さんは言います。「ひとりの人間として尊重すること、を家族に対してでもできているかってことを常に考えています。妻のレイチェルに、よく『あなたはコミュニケーションが下手。もつと説明して』って言われるんです。家族って、わかってくれるだろうという期待と、わかってるのが当たり前という前提がある。だんだん甘えちゃった



り。でも、結局は他人なんですよね」。

竹沢さんの妻、スコットランド出身の「レイチエルさん」。日本での立場は常に「外国人」であり、常に少数派として生きてきたであろうことは想像に難くありません。「だからこそ自分考えを伝えなきゃと思っただけです。私はワンセンテンスで伝えようとしちゃうんだけど、いつも近くでコミュニケーションをとる家族だからこそ、しっかりと伝える。それができるようになれば誰にだって上手に接することができると思うんです」。

そしてそのうえで、「その人のポジティブな面を探す」ことが大事だと竹沢さんは語ります。「まずその人を好きにならなきゃコミュニケーションなんて作れないし、好きになるためには、その人の良い、面白いなと思うところ、尊敬できるところを見つけたらコミュニケーションを取らないといけませんよね。ひとりとひと違う木を見て結果的に森になった。そんなコミュニケーションが理想だと思います」。

変化する「かもしれない」という希望

「一旦吐き出された言葉って、なかなか引つ込められないものですよ。特に、地位や立場の副任職の勤める霜村貞康さん、副任職の勤めたる、様々な立場の人たちが集まる対話の活動『未来会議』を続けている。そこでは、自分とは異なる立場や見解を表明し合うことも、共感と分かり合えなさ、その両方を感じてきた霜村さんに、コミュニケーションについて伺いました。」

ソーシャルスクエアには、さまざまな生きにくさを抱える方が自立や就職を目指し通っています。このコーナーではソーシャルスクエアの活動報告や利用しているメンバー、働くクルーの声をお届けします。

くれる方、伴走してくれる方がいると安心できる感覚はありませんか？

いわき市では、今後もメンバーさんが「興味、関心があること」「やってみたいけどひとりでは出来ないこと」に、安心してチャレンジできる機会を作っていきたくと考えています。

島根いわき市内郷内町水之出17
一シャルスクエアビル1F

246-84-8301

iwaki@sdws.jp

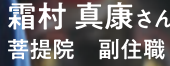
文・奥田峻史

 福島県いわき市内郷内町水之出17
 ソーシャルスクエアビル 1F
 **0246-84-8301**
 **ss_iwaki@sdws.jp**

スクエア夏祭り

セプトに「スクエア夏祭り」を開催しました。今回は体験型ブースとして、ヨーヨー釣り、割り箸鉄砲と風車のワークショップ、割り箸鉄砲を設置。射的に使う割り箸鉄砲は参加者自ら制作しました。販売コーナーでは地域の方々に協力して頂き、近隣のファミリーマートと中華料理店隣のは駄菓子やアイス、中華弁当やこま団子を、西宮で事業展開する作業所には手作りクッキーの販売をしてもらいました。

また今回はメンバーさんにも一緒に準備や当日の運営をお手伝いしてもらい、販売コーナーでは元気な笑顔で接客し、お勘定する人、隣で袋割てを客する人もいってしっかりと役割分担。担えられ手際よく対応していました。ワークシヨップでは風車と割り箸鉄砲の作り方、緑日ではヨーヨー釣りの遊び方をアテンド、順番待ちの方に声をかける対応や、受付でのチケット販売、なかにはイギリス人の方に



ある人ほど負けられなくなつてしまふ。日常も同じようなものかもしれない。言葉で応酬してしまふ。でも、諸行は無常ですから変わらないものなんてないんです。だからの意見は外からの要因でいくらでも変わるかもしれない。だからこそ、まずは反論せずに、そうかもしれないと受け止めることが大事だと思ふんです」。

かも知れない、という割り切り。断
定をせず、相手の意見を一旦は受け
止める。そんな霜村さんの考えは、
先ほだ紹介したコミュニケーション
のブロの言葉に通ずるものがありま
す。諸行無常。何ことも本質は流れ
動き、変化していくもの。自分も、
相手も、常に揺らぎのなかにある。
それは希望でもあるはずですよ。

「だれかの意見は、正しいかもしれないけれど、正しくないかもしれない。自分の考えも変わるかもしれないし、相手だって変わるかもしれない。もちろん変わらないかもしれないけれど、変わるかもしれないと思えばこそ、一旦受け止められるんで

自分に執着する生き物
だからこそ
他者を考える

す。そして、自分の言葉を受け止めてもらえたという体験が、何かを変えるきっかけになるかもしれない。それだけでもコミュニケーションの摩擦は減らせるような気がします。

**自分に執着する生き物だからこそ
他者を考える**

相手の言葉にまずは耳を傾けてみる。その体験が、相手との信頼を生み、今度はそうして初めて、自分の話を聞いてくれるようになる。言葉のキャッチボールとは、ボールを投げるのではなく、ボールを受け止めることから始まるのかもしれません。

「この世のものはすべて揺らいでいます。人の考えも同じですよ。だからこそ『今はいくという風に思ってるんだね』でいいし、そう言える場を私たちが作っていかないといけない。それは仏教の、この二千年変わらなくても、基本姿勢です。時代は変わっても、人間の苦しみや悩まなくて変わらないものかもしれませんね(霜村)」。

自分を尊重して欲しいからこそ、目の前の人を尊重する。人間は自分から執着してしまう生き物でもあるからなかなかそうは思えないんだけれども、そう思うとコミュニケーションを取ってみる。すると、前よりも滑らかに becoming していく。コミュニケーションのプロたちの実践は、そんなことを教えてくれています。

以前のごちやまゼタイムスの取材で、霜村さんは「ジリ貧」という言葉の由来に絡め、こんな話をしてくださいました。「修行者が修行を積んで、自分だけがその結果を得るものを『自利』と

※猪苗代町の「はじまりの美術館」とコラボレーションし、同美術館が持つ作品を表紙のビジュアルとして使わせて頂いております。



<http://hajimari-ac.com>

2018 秋号

発行日 2018年10月1日	企画 佐藤有佳里、松岡 真満
発行人 北山 剛	発行 特定非営利活動法人
編集 小松 理度（ヘクレキ舎）、渡辺 香	ソーシャルデザインワークス
デザイン 鶴澤 里佳（marutt）、小松 知寛	印刷 株式会社東海共同印刷
撮影 今泉 俊昭、奥田 峻史	協力 いわき市まち・未来創造
	支援事業

これは、障害のある人にも、生きにくさを抱えるだけかや、意見や見解の異なる人に対してでも共通するスキルです。それだけでなく、家族や友人や地域の人、つまり誰にでも使ええるコミュニケーションであり、何より自分の幅を広くし、多種多様なごちゃまぜの社会を生き抜くためのスキルになり得ます。やっぱ「自分のため」のスキルなのです。

本当に自分に選ってくるか。まずは自分の家族や友人から試してみてください。最初はちよつとだけ我慢が必要かもしれませんが、じつくりと聞かすことに徹してみてください。これまで見過ごしていた違いが感じられ、物事の捉え方が少し大きくなるのを実感できるかもしれません。

人間は分り合えない。そして、誰もが自分のことを大切だと思ってしまう。だからこそ適切な距離が必要で、距離を保つためにこそ、今回紹介した「スキル」や「型」が存在するのでしょう。

さあこのあたりでまともに入りましょう。ごちゃまぜのコミュニケーションとは。誰の言葉にもエラーや挿らざがあるという前提に立つたうえで、まずはだれかの話を聞くことから始めること。その話をすぐに評論せずフラットに受け止め、見えてきた景色を同じ目線で語ること。とても面倒なことに思えるけれど、巡り巡って「自利」として還つてると信じてみることに。

これは、障害のある人にも、生きにくさを抱えるだけかや、意見や見解の異なる人に対してでも共通するスキルです。それだけでなく、家族や友人や地域の人、つまり誰にでも使ええるコミュニケーションであり、何より自分の幅を広くし、多種多様なごちゃまぜの社会を生き抜くためのスキルになり得ます。やっぱり「自分のため」のスキルなのです。

本当に自分に選ってくるのか。まずは自分の家族や友人から試してみてください。最初はちょっとだけ我慢が大きい。最初はちやつとだけ我慢が必要かもしれませんが、じつくりと聞いてみるに徹してみてください。これまで見過ごしていた違いが感じられ、物事の捉え方が少し大きくなるのを実感できるかもしれません。

英語でスクエアや縁日の説明してくれたメンバーさんいました！

今回のイベントではメンバーさんがそれぞれ色を出し活躍する場面が多くみられ、新たな魅力を発見できる良い機会となりました。

兵庫県西宮市中前田町 1-27
ビットビル 1F
090-8377-4839
(事業所用携帯)
n_nishinomiya@sdws.jp

文・川野湧哉

兵庫県西宮市中前田町 1-27
ラビットビル 1F

 **090-8377-4839**
(事業所用携帯)

 **ss_nishinomiya@sdws.jp**

表紙アーティスト | 小林 紀美子

小林は郡山市内の福祉事業所「バス」に通う。小林が主にモチーフとして描くのは人物で、制作はバスでの創作活動の中で行われる。一見、みな同じように見える人物だが、事業所のスタッフや知人など実在の人物が描かれていることが多く、よく見ると毛髪や表情などが細かく描き分けられている。迷いなく一気に描かれる人物はシンプルな形で表現されており、簡素化された可愛らしさに、思わず類がほころぶ。作品が醸す雰囲気は、いつも周りを気遣う小林の人物が投影されているようだ。主な展覧会に「まちなか美術館」(猪苗代町内/福島/2018)、「LOOK!there it is ホラそこにあるよ!」(日本赤十字社埼玉県支部旧社屋/埼玉/2017)他。

今回の特集は、誰もが悩んだ経験があるであろうコミュニケーションについてです。その悩み解決のヒントにいただけるよう、様々な立場の方にお話を聞かせていただきました。様々な違いのある人が生きるとはどんな社会ではコミュニケーションの悩みは尽きないかも知れません。しかし、お互いのちょっとした意識や工夫で解決できるのも事実です。この号が皆さんのコミュニケーションの参考になれば嬉しく思います。(企画／松岡真満)

編集
後記